

# 清代八股文における八股（提股・出題・中股・後股）と收股について（2）

The Eight Legs (Initial Leg, Revealing the Theme, Middle Leg, Later Leg) and Summary Leg of the Qing Dynasty Eight-legged Essay (2)

滝 野 邦 雄  
Takino, Kunio

## （iv）『文家模範』

山西運城縣の貢生の王企妃『文家模範』（乾隆三十一年〔一七六六〕刊）は、提股・出題・中股・後股・收股を次のように解説する。

まず、提股について、次のようにいう。

〔提股〕一題の大意 起講に於いて之を領す。一篇の大勢（あらまし） 提股に於いて之を領す。蓋し起講は自ずから一局（一部分）を成す。而れども提股は則ち中股・後股を合わせて共に一局を成す。然らば提股は入路の始めと爲し、實義は宜しく盡く發すべからず。題の筋絡（氣血の通路）の處を擇び、一たび之を提掇（提出）し、之を叩きて其の動くを欲し、之を呼びて其の醒むるを欲す。然る後に中股 正筆を用う可きなり。提股の緊處に至りては、全く末句に在り。要するに本題の神と相い注ぎて聲相い呼せり。蓋し提股の末句 出題の一句に緊接す。[そこで] 能く本題をして躍躍として出さんと欲するの勢い有らしめれば、則ち出題の處の勢いに借ること只だ一點（一部分）なり、而して自ずから洞心爽目（驚いて目をみはる）なり。提比 魚鱗の小股を用いる者有り。又た對偶を用いざる者有り。一段を單行する者有り。然れども須く氣勢有り・識①力有るを要むべし。[そうすれば] 方に之を爲す可し。蓋し提股の變格なり（『文家模範』 不分卷・三十葉～三十一葉）。

①有識：『斯文規範』に「識見・能見有りて<sup>たしか</sup>的に到るを言うなり……」

（『斯文規範』卷之七・三十八葉・「一曰有識」条）。

起講が問題文である題目のおおまかの意味を受けるのに対して、提股は題目をうけて書く回答のあらましを説明する部分である。提股は中股と後股とをあわせてひとまとまりのものとなるので、提股では、すべてを説きつくすべきではない。

出題については、次のようにいう。

〔出題〕提股の後には必ず出題を用う。以て観る者の目を醒ますこと、猶お龍を畫くの點晴①せんと欲するがごときなり。其の法 題字を將<sup>も</sup>つて順出する者有り・題字を將<sup>も</sup>つて顛倒（逆さまに）錯出（入り組んで出す）する者有り・止だ題の緊要（重要な）の字を出し、餘は俱に畧去する者有り・全く本題を出し、而して復た餘の意を以て之を補う者有り、此れ皆な出題の正格なり。又た逐股（股ごとに）題（題目）を講（解釈）して、逐股（股ごとに）題（題目）を出す者有り・題（題目）の一句ならざれば、前半篇（前半部）に一句を出し、後半篇（後半部）に又た一句を出す者有り・全篇養局し、只だ渾講を用い、終篇に至りて方<sup>まさ</sup>に題を出す者有り。此れ又た變格にして其の正を失わざる者なり（『文家模範』不分卷・三十一葉）。

①點晴：『斯文規範』に「虚字を作す者 既に先ず虚字の神を發出し、随えば即ち點題すること、猶お龍を畫く者 既に先ず龍の全身を畫き出し、随いて即ち點晴するがごときを言うなり。故に點晴と曰う」（『斯文規範』卷之六・十九葉・「一曰點晴」条）。

提股の後には、必ず出題を作る。出題は、採点者の目を醒ますために、ポイントとなる言葉を取り出し提示する部分である。

中股については、次のようにいう。

〔中股〕文の中股有るは、猶お人の腹心有る・室の堂奥有るがごとし。一題の大義 全く此に於いて之を發す。作者は須く全副<sup>すべて</sup>の精神を聚めて、本題を將<sup>も</sup>つて詳細に体贴（理解）し、痛切に發揮（論述する）し、實處に於いて詮理（説明）し、虚處に於いて傳神①（真髓を伝える）し、務めて圓滿②

に曉暢（精通）し、毫も滲漏（破綻）無からしむべし。[そうすれば] 斯れ題に負かず。文家 立柱の法有ること、猶お造屋するに必ず柱を立てるを先にするがごとし。蓋し文の骨柱有るや、必ず一意 到り直す。若し兩意を用うれば、便ち夾雜（入り混じる）なり。又た須く章法に洞曉（精通）すべし。[章法には] 推原③法有り・襯貼④法有り・涵泳（深く理解する）法有り・跌頓⑤法有り・繳足⑥法有り。蓋し章法 起承轉合⑦に外ならず、而して中股 尤も要緊と爲す。正位の講じて足るに至れば、股末 必ず題位（題目の要求）に勒還（引き締めてもどす）す。蓋し正意を以て中股を完<sup>おわ</sup>り、而して餘意を以て後股を留むるなり（『文家模範』不分卷・三十一葉～三十二葉）。

①傳神：光緒五年新鐫『初學題類文法合編』に「[傳神] 神は宜しく強旺なるべし、宜しく清秀なるべし、宜しく幽閒なるべし。一題 手に到れば、必ず我の精神を聚め、古人の精神を會す。斯れ古人の胸臆を寫<sup>か</sup>くこと、己の胸臆を寫くが如くす。字字の精神、語語の精神、洋洋灑灑（規模・氣勢が盛大である）として、心膽 俱に張れば、豈に快事に非ずや」（『初學題類文法合編』下卷・六葉・「傳神」条）。

②圓滿：『斯文規範』に「辭氣 充滿して、少しの欠缺（不足）の氣無く、神完（精神が充滿する）に足るを言うなり」（『斯文規範』卷之七・三十七葉・「一曰圓滿」条）。

③推原：『斯文規範』に「一股の中の正意 已に盡くし、股尾に更に推原して<sup>ひとつお</sup>一番の然る所以を出だすを言うなり。唐翼修 曰く、推原とは、或いは後面よりして其の來歴を推原す、或いは行事に因りて其の用心を推原す、或いは疑似に因りて其の然る所以を推原す。特に股中に有るのみならず、且つ通篇 此の法を用いる者有り、亦た通篇 此の法を用いて更に代字法を借りて以て之を行なう者有り。王季仲の「驅虎豹犀象而遠之」（『孟子』滕文公下）一句題文・錢樞（浙江會稽の人。萬曆八年庚辰科〔一五八〇年〕の三甲二十四名の進士）

の「出」一字題文、通篇 皆な代法を用う。[これらは] 第だ代法 (a) を爲すを知るのみ。豈に實の推原を知らんや、と」(『斯文規範』 卷之三・十八葉～十九葉・「一曰推原」条)。

(a) 代法：『讀書作文譜』に「[代] 唐彪 曰く、聖賢の人の賢否を論ずる、或いは事の是非を論ずるが如きは、我 其の題を作るに、已に是れ聖賢の口吻に代わりて論を發するなり。然れども單に聖賢の口氣に代わるも、猶お描寫して曲に盡す能わざるがごとし。乃ち更に聖賢の口氣を將つて其の人に代わりて自ら一番を説けば、則ち神氣 畢露せざるは無し。此れ代法の由り起こる所なり……」(『讀書作文譜』 卷之七・七葉・「代」条)。

④ 襯貼：『斯文規範』に「唐翼修 曰く、凡そ文の襯(際立たせる)有るは、金玉の雕鏤を用うる・綾綺の花錦を装うが如し。日用に益無しと雖も、而れども光彩陸離し、貴重(高位高官)に入らしむは、端に此に在り。文章 固より必ずしも襯を用いざる者有り。若し當に襯すべき者を襯せざれば、則ち匡廓(輪郭) 狹小、意味 單薄にして、華瞻(華美華麗)の致す無し。但だ襯するの理は一ならず。或いは目の見る所を以て襯す、或いは耳の聞く所を以て襯す、或いは歴史を以て襯す、或いは古人の往事を以て襯す、或いは對面を以て襯す、或いは旁觀を以て襯す、或いは上文を牽引し襯す、或いは下意を逆取して襯するは、皆な襯貼なり。作文 襯貼を知れば則ち文章 光彩を充滿すること、何ぞ言を待たんや」(『斯文規範』 卷之六・十九葉・「一曰襯貼」条)。

⑤ 跌頓：『斯文規範』に「頓は振頓(整頓する)なり。「跌」字 之と配を作せば、則ち「跌」字 便ち「反」字と別つ無し。題字 既に出るの後に於いて、復た反筆を用いて以て之を振頓するを言うなり」(『斯文規範』 卷之六・二十一葉・「一曰跌頓」条)。

⑥繳足：『斯文規範』に「一股中の正位 已に完<sup>おわ</sup>り、股尾に其の意を繳足（十分に提出する）するを言う」（『斯文規範』卷之三・二十一葉・「一曰繳足」条）。

⑦起承轉合：『斯文規範』に「一股中に一頭を前に起し、次に承接して之を言い、實意もて完る後、復た另<sup>べつ</sup>に一灣（曲がりくねった流水）を轉づ。然る後に合わせて題面の上に到るを言うなり。呉侶白 曰く、前輩の文 一篇の中、多く十數股なる者有り、其の股 體短なれば或いは四五句、或いは五六句なり。本股 起承轉合無し。通篇を以て起承轉合と爲す。所以に其の體 圓・其の神 雋にして古文の意有り。今の長比排偶の若きは、自ら起承轉合を爲せば、則ち起比・中比・後比の三處に或いは三截され、神氣 貫かず、全く古文の意無し。然らば則ち之をして一股の内に於いて四法を求むるを專にせしめる者は、以て必ずしもせざる可きなり」（『斯文規範』卷之三・二十葉・「一曰起承轉合」条）。

中股は、八股文の中心となるところであり、作者はすべての精神を集中して、題目を解釈して、論述すべきである。柱を立てるのに諸法があるが、その中心となるものは起承轉合を用いるものである。

後股については、次のようにいう。

〔後股〕乃ち中股を承接し、而して其の餘の意を發する者なり。一題の要旨は、中股 發洩（明らかに示す）し已に盡く。作者 此に至りて思路（文の構想） 幾んど窮まる。即ち閱る者も此に至りて亦た目光 漸く緩し。然れども文章 福命に關すれば、作者は須く別に新思<sup>の</sup>を展べ、另<sup>べつ</sup>に異采を標し、閱る者をして名山に遊び、峯迴路轉①し、別に洞天を現わしむべし。愈いよ出れば愈いよ奇にして、轉轉として勝ちを争いて、人をして「萬壑千巖」②の「應接 暇あらず」③の趣有らしめば、乃ち福文字有りと稱す（『文家模範』不分卷・三十二葉）。

①峯迴路轉：『斯文規範』に「上一層 既に完<sup>おわ</sup>り、下一層 即ち上面の

勢いを承けて、<sup>つ</sup>別に一番の意思を轉出すること、峯巒（連なった山の頂）に遇いて道路無きを苦しみ、身を回して審視し、路 即ち轉出するが如きを言うなり。後の「部分で説明する」「無中生有」と名を異にして實を同じくす」（『斯文規範』卷之六・二十二葉・「一曰峯迴路轉」条）。

②『世説新語』言語に「千巖 秀を競い、萬壑 流れを爭う」。

③『世説新語』言語に「山川 自ずから相い發して、人をして應接暇あらざらしむ」。

後股は、中股を承けて、その不足しているところを論述するところである。全体の要旨は、中股において言い尽くしているので、後股になると述べるものがなくなってしまう。採点者の注意力もここに至ると散漫になる。しかし、ここで新しい方向を示すことができれば、非常に有効となるのである。

收股については、次のようにいう。

〔收股〕一に繳股と名づく。蓋し一篇を總じて之を收束するなり。起〔講〕より此に至り、題意を發揮（論述・展開）して已に盡くせり。必ず數語を以て之を收む。兩句もて股を成す者有り・三句もて股を成す者有り。筆法最も緊嚴なるを要す。意志 最も周匝（周到・綿密）なるを要す。蓋し特に全篇の局を煞（收める）せざるのみならず、且つ以て全章の案を結ぶ。法に一反一正①にして、一股もて本題を束し、一股もて章旨を繳（提出）する者有り、一股もて本題を束し、一股もて下文を透②する者有り。〔すべて〕機に隨いて運用すれば可なり（『文家模範』不分卷・三十二葉）。

①一反一正：『斯文規範』に「前の一股が是れ反、後の一股が是れ正なるを言うなり」（『斯文規範』卷之三・十七葉・「一曰一反一正」条）。

②透：『斯文規範』に「透は通なり、過なり。講じて此の處に在るも、彼の處の精神或いは字句 已に豫め先ず通じ過ぎ去くを言うなり」（『斯文規範』卷之五・四葉・「一曰透起」条）。

收股は、繳股とも言う。全体をまとめて収束させるところである。起講からこ

ここに至るまでに、論述しつくしているため、必ず数語でしめくくる。

### （ⅴ）『啓悟集』

江寧の汪承忠の『啓悟集』は提二比（起股）・虚股・出題・中比（中股）・後股・束股・小結（收股）を次のように解説する。

まず提股について次のようにいう。

提二比（提股） 正に文章の初めて入講の處なり。虚を貴びて實を貴ばず。短を貴びて長を貴ばず。然れども虚にして迂遠（實際とかけ離れる）なる可からず。短にして局促（小さくまとまる）なる可からず。上文より翻し<sup>くつがえ</sup>入る者有り。本位に就きて講起する者有り。[これらには] 大約 三法有り。一は反振法①にして、反面②より題勢を振り起すものなり。一は虚引法③にして、虚處より題意を引き起すものなり。一は溯源法にして、源頭（根源）より題理<sup>さかのぼ</sup>を溯り出すものなり。善く文を爲す者は多く反振を用い、以て其の勢いの高きを取り、易く人をして動目（注目）せしむ。其の次は虚引を用い、以て其の意の隱なるを用う、亦た人をして目を醒さしむ。溯源の若きは、必ず須く理境 晶瑩（きらきと透明）にして、筆力 深厚なるべき者にして、方に之を爲す可し。故に名作は往往にして此の法を用う。又た題比の緊要（重要）の處は全く末句に在り。蓋し提比（提股）の末句は、出題に緊接す。末句は能く題に本づき、隱躍（かすかなさま）として出でんと欲するの勢い有らしめば、則ち題を將って勢いの一點に借る。緩き者は輕雲の岫（山のほらあな）より吐くが如く、急なる者は高山の石を墮すが如し。出落④ 皆な佳し。提比（提股）の末句 題に針對（ねらいを定める）せず、以て下 勉強（無理に）に點題すれば、則ち扭捻（ぎこちなく作成する）牽扯（巻き込む）にして、觀る者をして目を刺（目を眩ませる）さしめざるか。又た提比に二病有り。一は、文 平實を犯すを恐れ、遠く題の外より説き來り、題中の緊要（要点）に關わらず。此れ即ち迂遠の病なり。一は、文 寬懈（だらだらする）を犯すを恐れ、迫りて題位に就きて説

き起こし、題前の步驟（順序）を得ず。此れ即ち局促（小さくまとまる）の病なり。應試の文 前の七行を重ぬ。若し此の二病を犯せば、安くんぞ能く入穀（合格）せんや。須く切に之を忌むべし（光緒戊子重鐫『増註初學啓悟集』<sup>(1)</sup> 卷一・提比式法・十八葉～十九葉）。

①反振：『斯文規範』に「振は、動なり。字面に於いて未だ之を出さず、先ず反筆（a）を用いて以て題中の字面を振動するを言うなり」（『斯文規範』卷之六・十五葉・「一曰反振」条）。

(a) 反筆：『初學題類文法合編』に「〔反筆〕凡そ題に正面有れば、必ず反面有り。反面より發揮（論述・展開）すれば、則ち正面 愈いよ醒む。惟だ反面 [題目の] 上下の文に在る者は、此の法を用うる可からず」（『初學題類文法合編』下卷・一葉・「反筆」条）。

②反面：『斯文規範』に「其の論説 題に反して之を言うを言うなり」（『斯文規範』卷之三・二十一葉・「一曰反面」条）。

③虚引：『斯文規範』に「引とは乃ち引き起こすの意なり。前面に於いて虚虚として題中の字面を引き起こすを言うなり。以上の三法（虚逼・虚逗・虚引） 名を異にするも實を同じくす」（『斯文規範』卷之六・十七葉・「一曰虚引」条）。

④出落：劉熙載の『藝概』（同治十二年〔一八七三〕自序）に「出・落

(1) 光緒戊子十四年〔一八八八〕重鐫『増註初學啓悟集』は、道光庚子二十年〔一八四〇〕『幼童舉業啓悟集』を「増註」したものである。提股と中股とについての説明以外、両者の相違は、僅かでしかない。そこで、拙稿では、提股と中股との解説のみは『増註初學啓悟集』から引用する。なお、『幼童舉業啓悟集』では、次のようになっている。

〔提股法〕提二比（提股） 正に文章の初めて入講の處なり。虚を貴びて寔（實）を貴ばず。短を貴びて長を貴ばず。然れども虚にして迂遠（實際とかけ離れる）なる可からず。短にして局促（小さくまとまる）なる可からず。上文より翻し入る者有り。本位に就きて講じ入る者有り。摠じて反正 相い生じ、開合 自然なるを要す。○提股の緊要は末句に在り。蓋し提股の末句は、出題に緊接す。末句は能く題に本づき、隱躍（かすかな様）として出でんと欲するの勢い有らしめば、則ち出題 勢いの一點に借る。觀る者 洞心爽目（驚いて目をみはる）ならざるは無し（道光庚子二十年〔一八四〇〕『幼童舉業啓悟集』提比式法第三冊・「提股法」条・法一葉）。



の二字 別有り。題字無き處より題字を點する、之を「出」と謂う可し。「落」と謂う可からず。題中の此の字より彼の字を出すに、彼の字に就きて言う、之を「出」と謂い、此れより彼に之<sup>ゆ</sup>に就きて言う、之を「落」と謂う。出落の來路・去路を審らかにす、文の脈理斯れ眞なり」（『藝概』卷六・經義概・四葉～五葉）。

提股（提二比）は、始めの部分で、虚であり短であることが求められる。ただし、虚であっても題目の実際とかけ離れたり、短であっても小さくまとまてはいけない。書き方にはおおよそ反振法・虚引法・溯源法の三つがある。提股の重要なところは、末句にある。

『啓悟集』では、提股と出題との間に置くことがある虚股についても解説し、次のようにいう。

〔虚股法〕提股の後、接するに虚股を以て、兩句を用いて相い對する者有り。四句或いは六句を用いて相い對する者有り。最も輕・圓・靈・轉なるを要す。蓋し提股の意の未だ盡さざる有りて、出題の太<sup>おほ</sup>いに偏<sup>せま</sup>るを恐れれば、則ち虚股を用いて紆徐（やわらかでゆったりしている）頓宕<sup>①</sup>し、以て出題の地と爲す。此れ文の姿態（風格）有りて局度（文の構成）有るの處なり。近ごろ提比の下 既に出題とす可きを以て、即ち虚比を用いず。亦た簡捷（簡便）なるを覺ゆ（道光庚子二十年〔一八四〇〕『幼童舉業啓悟集』提比式法第三冊・「虚股法」条・法一葉：光緒戊子十四年〔一八八八〕重鐫『増註初學啓悟集』（卷一・十九葉・「虚股法」条）も同じ）。

①頓：『初學題類文法合編』に「頓とは、停頓なり。提すれば、則ち聳起するを主とし、頓すれば、則ち按<sup>とどめる</sup>住を主とす。聳起する者は、氣機流走し、按住する者は、氣勢 緩平す。而して亦た中流 停畜（溜まる）して、住<sup>とど</sup>むに似て住むに非ざる者有り。此れ練氣の「醇乎として醇なる者なり」（韓愈「讀荀」）。揣摩（研究）家 尚お其れ分別して之を觀よ」（『初學題類文法合編』下卷・十葉・「頓筆」条）。

宕：『初學題類文法合編』に「宕とは、宕開（延ばし開く）の謂いな

り。文勢 此に至り、已に緊緊として題に逼る。如し一筆を宕開せざれば、勢い必ず正面に緊接し、直率に流る……（『初學題類文法合編』下巻・一葉～二葉・「宕筆」条）。

提股の後に、二句あるいは四句・六句の対句を用いて、虚股を置くこともある。虚股は、提比の部分で論述すべきことを言い尽くせない時に用いるものである。出題については、次のようにいう。

〔出題法〕出題を作文するは、猶お龍を畫くに點晴①するがごときなり。破〔題〕・承〔題〕より以後、文 半篇に<sup>ちか</sup>幾きも、題の全身 未だ<sup>あら</sup>露われず、故に提股の後に必ず出題を用いて、以て観る者の目を醒ます。題を將って順い出す者有り、顛倒（逆さまに）錯出（入り組んで出す）する者有り、止（『増註初學啓悟集』は「祇」に作る）だ題の緊要の字を出す者有り、本題を全出する者有り、又た逐股（股ごとに）に題を講じて逐股（股ごとに）に點出する者有り、題の一句ならざれば、前半 一二句を出し、後半 又た一二句を出す者有り、一句題にして、前に半截を出し、後に半截を出す者有り、通篇 養局して、末句に至りて、方に全題を出す者有り。總じて作者の文に臨みて變化するに在るのみ（道光庚子二十年〔一八四〇〕『幼童舉業啓悟集』提比式法第三冊・「出題法」条・法一葉：光緒戊子十四年〔一八八八〕重鐫『増註初學啓悟集』（卷一・十九葉・「出題法」条）も同じ）。

①點晴：『斯文規範』によれば「虚字を作す者 既に先ず虚字の神を發出し、随えば即ち點題すること、猶お龍を畫く者 既に先ず龍の全身を畫き出し、随いて即ち點晴するがごときを言うなり。故に點晴と曰う」（『斯文規範』卷之六・十九葉・「一曰點晴」条）。

八股に出題の部分があるのは、ポイントとなる言葉を持ち出して文章を引き立たせるようなものである。この部分に到り、全体の半分近くなるものの、題目の全てを説き尽くしていない。そこで、出題の部分を作り、見る者の目を醒ます。

中股については、次のようにいう。

〔中股〕提比（提股）・出題の後、即ち中比（中股）有り。此れ猶お人の腹

有り・室の堂有るがごとし。一篇の正位 此に于いて擬定（決定）し、一篇の大義 此に于いて發明（詳しく述べる）す。一語も寛鬆（ゆったりする）なる・一語も簡略なる可からず。須く全副の精神を聚めて、本題を將つて詳細に體貼（理解）し、痛切に發揮（論述・展開）し、實處に于いて詮理（説明）し、復た虚處に于いて傳神なるべし。務めて圓滿（完全で）にして曉暢（精通）し、毫も滲漏（破綻）なからしむれば、方に題に負かず。每股の文字 皆な當に柱を立てるべしと雖も、而れども中股 尤も〔緊〕要なり。柱を立てるに分明なれば、<sup>おおまか</sup>僮侗に合掌（対句を作る）するを得ず。起語は即ち須く虚峯を豎起し、柱の意を提明し、人をして一望して知らしむ。或いは題字に従いて柱を立つ、或いは註語に従いて柱を立つ、或いは我が心に從いて事理を揣度（推し量る）して柱を立つ、或いは前說に従いて精蘊を闡發（解明）して柱を立つ。務めて兩柱の匹敵するを要め、又た前柱と後柱と次第を分かつを要む。起語の下は、反承を用いること多く、然る後に正位に轉入し、收合の處に至りて穩貼なるを要む。宜しく「矣」①・「耳（爾）」②・「歟」③等の字を用い、其の餘の虚字は亦た文勢に隨いて之を用うべし。或いは硬煞を用いるも亦た佳し。惟だ「耶」④・「哉」⑤字は最も忌む（光緒戊子重鐫『増註初學啓悟集』卷二・全篇式法・一葉・「中比」条）。

①矣：截然として緊煞（はっきりと終わらせる）の詞なり。凡そ文義説き煞えんと欲すれば、則ち之を用う。一定にして移らざるの意

（2）道光庚子二十年『幼童舉業啓悟集』では、次のようになっている。

提比・出題の後、即ち中比（中股）有り。此れ猶お人の腹心有り・室の堂有るがごとし。一篇の大局・一篇の大義 此に至りて之を發す。一筆も簡略なる可からず。須く全副（すべての）の精神を聚めて、本題を將つて詳細に體貼（理解）し、痛切に發揮（論述・展開）し、實處に于いて詮理（説明）し、復た虚處に于いて傳神すべし。務めて圓滿（完全で）曉暢（精通）して、毫も滲漏（破綻）なからしむれば、方に題に負かず。每股の文字 皆な當に柱を立つべしと雖も、而れども中股 尤も緊要（重要）と爲す。煞尾（末尾）に至れば、隱貼なるを要す。宜しく「矣」・「爾」・「歟」等の字を用い、其の餘の虚字は亦た文勢に隨いて之を用うべし。或いは突住を用いるも亦た佳し。惟だ「耶」・「哉」字は最も忌む（道光庚子二十年〔一八四〇〕『幼童舉業啓悟集』提比式法第四冊・「全篇文法」条・一葉）。

有り。又た抑して復た起こるの辭なり。凡そ下文を申ぶるを將<sup>も</sup>て故に一按なる者を作し、亦た之を用う（『讀書作文譜』卷之七・十六葉）。

②耳：此れ勢いに順いて軽く落すの詞なり。易きに至り難きこと無し  
の意有り。又た然らずの意有り。其の意 遠くして、韻 長し。文中を轉ずるに往々として之を用う（『讀書作文譜』卷之七・十六葉）。

③歟：「乎」字と同義なり。然れども「乎」字は軽く、「歟」字は隱なり。「乎」字は疑いて未だ定まらず。「歟」字は則ち疑いて而れども疑わざる者在る有り。「君子人歟」（『論語』泰伯）・「其爲仁之本歟」・（『論語』學而）・「其舜也歟」（『論語』衛靈公）如き、以て例とし觀る可し（『讀書作文譜』卷之七・十七葉）。

④耶：亦た疑うの詞なり。「乎」・「哉」字と相い類す。但し微かに帶びる婉轉（婉曲で含蓄ある）たる詰問の意は「乎」・「哉」字に較べて趣味（味わい） 悠長なり（『讀書作文譜』卷之七・十七葉）。

⑤哉：畧ぼ「乎」字と近似す。然れども「乎」字は多く疑う。「哉」字は却って驚き怪しむの意・嗟嘆の意・贊揚の意・自得の意有り。凡そ文の之を反せんと欲する・之を駁せんと欲すれば、則ち此れを用う（『讀書作文譜』卷之七・十七葉）。

中股（中比）は八股の中の重要な箇所なので、すべての精神を集中して作成しなければならない。ふつう起・反承・転・収の形で議論を展開する起の箇所では中股の意味をはっきり提出し、その後ろは、反承を用いることが多い。そして、転で正位に転じ、収の箇所で穩貼にする。「矣」・「耳（爾）」・「歟」等の虚字を用いたり、硬煞を用いるのでもよい。ただし、「耶」・「哉」字は避ける。

後股については、次のようにいう。

〔後股〕中股の下 即ち後股有り。乃ち中股を承け、其の餘の意を發する者なり。題の要旨 中股に發洩（明らかに示す）し已に完り、作者 或いは另に一議を起こす、或いは題面に旁觀①す、或いは中股に接して勢いに借

りて翻掉す、或いは本題を將って一步を推開し、深く一層を進む。要するに閱る者をして名山に遊び、山の勢 已に盡き、峯 迴りて路 轉ずれば、別に洞天（別のすぐれた景色） 現われ、人をして「萬壑千巖」（『世説新語』言語）の「應接に暇あらざる」（『世説新語』言語）の趣有らしむるが如し。斯れ文章の大觀と爲す。其の股末の收煞（收處）は、上文を歸結する者有り、章旨を照應する者有り、下文を拖逗（引き伸ばす）する者有り、盡さんと欲して盡さず、故に摇曳（揺れ動かす）を作して以て姿態（風格）を生ずる者有り。煞尾（末尾）・住脚（字句を解釈した箇所）〔の虚字は〕宜しく「耶」・「哉」等の字を用いるべし。突住も亦た可なり。其餘の虚字は皆な用う可きと雖も、而れども軟弱（弱弱しく）にして聲調無き者は却て須く之を忌むべし（道光庚子二十年〔一八四〇〕『幼童舉業啓悟集』提比式法第四冊・「全篇文法」条<sup>ママ</sup>・法一葉<sup>(3)</sup>）。

① 襯：『初學題類文法合編』に「襯（際立たせる）とは、彼の物を以て此の物を襯するなり。題〔目〕 日月を説けば、星辰の類を以て襯を作る。題〔目〕 河海を説けば、江淮の類を以て襯を作る。高一層の襯する者有れば、低一層の襯する者有り。對面の襯する者有れば、側面の襯する者有り。畫家の烘雲託月（雲を塗りつぶして月をはっきり

（3）光緒戊子十四年〔一八八八〕重鐫『増註初學啓悟集』も、ほぼ同じである。

〔後股〕中股の下 即ち後股有り。乃ち中股を承け、其餘の意を發する者なり。題の要旨 中股に發洩（明らかに示す）し已に完り、作者 或いは另に一議を豎（立てる）にす、或いは數層に旁襯す、或いは中股に接して勢いに借りて翻剔し、中股の義の未だ備わらざる所を補す、或いは中股を承け理に就きて堪深し、中股の語の未だ完ならざる所を補す。要するに閱る者をして名山に遊び、山の勢 已に盡き、峯 迴りて路 轉ずれば、洞天（別のすぐれた景色） 別に現われ、人をして「萬壑千巖」（『世説新語』言語）の「應接に暇あらざる」（『世説新語』言語）の趣有らしむるが如し。斯れ文章の大觀と爲す。其の股末の收處は、上文を歸結する者有り、章旨を照應する者有り、下文を拖逗（引き伸ばす）する者有り、盡さんと欲して盡さず、故に摇曳（揺れ動かす）を作して以て姿態（風格）を生ずる者有り。住脚（字句を解釈した箇所）の虚字は宜しく「耶」・「哉」等の字を用いるべし。硬煞も亦た可なり。其餘の虚字は皆な用う可きと雖も、而れども軟弱（弱弱しく）にして聲調無き者は却て須く謹みて之を忌むべし（光緒戊子十四年〔一八八八〕重鐫『増註初學啓悟集』卷二・全篇式法・一葉～二葉・「出題法」条）。

りさせるように、周りとの対照をきわだたせる) が如き、是れなり」

(『初學題類文法合編』下巻・一葉・「襯筆」条)。

後股は、中股で言い尽くしていないことを論述する部分である。読者に終わりがかなと思ったら、別に新しい局面が現れるというような気持ちにさせることができるのがすぐれたものである。

また、『啓悟集』では、後股と收股(小結)との間に置くことがある束股について、次のようにいう。

〔束股〕後股の下は仍お束股有り(『増註初學啓悟集』は「用」に作る)。乃ち一篇の局を總じて收束する者なり。兩句もて股を成す者有り。三四句もて股を成す者有り。或いは一反一正①、或いは一賓一主、或いは一股もて本題を束し、一股もて章旨を繳(提出)す、或いは一股もて本題を束(たば)ね、一股もて下文を透(『斯文規範』によれば「透は通なり、過なり」)す。惟れ機に隨いて運筆(書く)すれば可なり。○近日の八股の文字 虛比・束比を用いる者最も少なし。或いは虛比有れば、則ち束比無し。或いは束比有れば、則ち虛比無し。甚だしきは二者俱に無きに至る。止(『増註初學啓悟集』は「祇」に作る)だ六比を做す者極めて多し(道光庚子二十年〔一八四〇〕『幼童舉業啓悟集』全篇式法第四冊・法一葉・「全篇文法」条：光緒戊子十四年〔一八八八〕重鐫『増註初學啓悟集』(卷二・二葉・「束股法」条)も同じ)。

①一反一正：『斯文規範』によれば「前の一股が是れ反、後の一股が是れ

正なるを言う」(『斯文規範』卷之三・十八葉・「一曰一反一正」条)。

束股は、八股の箇所のまとめをする部分である。ただ、後になると虚股・束股を用いることが少なくなってきた。

小結(收股)については、次のようにいう。

〔小結〕束比の後は、一兩句を單結す、或いは數句に至る。之を小結(收股)と謂う。下文を直透する者有り、上文を繳足する者有り、本題に就きて收束する者有り。用筆に姿態(風格)有るを要し、最も直率(率直に表わす)

なるを怕る（道光庚子二十年〔一八四〇〕『幼童舉業啓悟集』全篇式法第四冊・法一葉<sup>ママ</sup>～法二葉<sup>ママ</sup>・「全篇文法」条：光緒戊子十四年〔一八八八〕重鐫『増註初學啓悟集』（卷二・二葉・「小結法」条）も同じ）。

小結（收股）は、全体の最後の部分である。一二句もしくは数句でまとめる。書き方に風格があることが必要で、率直に表現することは避ける。

（つづく）